

いのちと地域を守る

円滑な避難 実現へ工夫

福井県は2012年、東日本大震災を受けて津波高の想定を一律2.5メートルから最大8メートルに見直し、日本海の若狭湾沖でマグニチュード(M)7級の地震が起きた場合、福井市など沿岸11市町で1229秒が浸水し、約1万1000人への影響を予測している。県内で最も高い津波高はむすび塾の会場となった坂井市三国町の8.68メートル、東尋常小学校海水浴場もあり、観光客でにぎわう。

地震後数分で第1波到達も

日本海で津波が発生した主な地震

1804年	象潟地震(秋田、山形県境付近)
1833年	庄内沖地震(山形県沖)
1940年	積丹半島沖地震(北海道沖)
1964年	新潟地震(新潟県沖)
1983年	日本海中部地震(秋田県沖)
1993年	北海道南西沖地震

(注) カッコ内は震源

井市も6.87メートルを超える。日本海側の地震は震源が陸から近いものも多く、津波到達までの時間が短いとされる。福井県の想定も第1波が数分で来るケースがある。6月18日に山形県沖で起きた地震でも、発生から5分後に鶴岡市で第1波を観測しており、備えが必要だ。

地震被害への警戒も欠かさない。福井県の想定ではM7.6の直下型地震が発生した際、死者は最悪約2000人と推計している。同県が過去最も大きな被害を受けたのは1948年、初めて適用されたほか、福

福井県津波高想定見直し 2.5メートル→最大8メートル



避難訓練の後、貸付したことを話し合う参加者(6月29日午前11時15分ごろ、福井県坂井市三国町の三国コミュニティセンター)

素早く津波避難する工夫



イラスト: 板垣 潤

監修: 減災・復興支援機構

防災意識向上に課題

福井県坂井市の三国町地区での模擬避難訓練の後、防災ワークショップ「むすび塾」の参加者13人が三国コミュニティセンターで津波避難の課題を語り合った。次の災害に備えた訓練の大切さや、避難を円滑にする工夫の必要性を確認した。

避難訓練を振り返った参加者からは「実際に歩いてみると坂が急で大変だった」「普段は車に乗っているので近く感じていたが、思ったより距離があった」という声が上がった。北前船が寄港してにぎわった三国町地区は木造の古い建物が多く、訓練では道の幅が狭い住宅街も通った。防災活動に取り組み中

東大准教授の広井悠さん(40)は「三国は地震発生から10分前後で津波が来る想定で避難が難しい地区でもある。古い家やブロック塀もあり、少しずつ改善することが必要だ。訓練で改善のヒントを探し、防災減災とまちづくりを両立させる取り組みを進めたい」と話した。

東日本大震災の語り部から

まずは「てんでんこ」

震災発生時は気仙沼消防署の指揮隊長を務め、津波火災の消火活動に当たりました。気仙沼の石油タンクが破壊され、炎が上りました。辺りは火の海で、夜になっても層間のような光景でした。

元気仙沼消防署指揮隊長
佐藤 誠悦さん(67)



命を守る訓練を積んだ自分が愛する女房を助けられませんでした。梅やんでも梅やみきれません。二度と同じような犠牲を出さないため、生きる術として防災力を強化することが大切です。震災の教訓を後世に語り継ぐのが自分の使命。命ある限り伝えていきたい。

家族信じ身を守って

震災時は東松島市野蒜地区に住み、鳴瀬川河口近くにあった会社事務所で地震に遭いました。10分の津波が押し寄せ、私と夫は家や事務所ごと流されました。

水中土木会社役員
安倍志摩子さん(57)



来ないで思い込んでいたから、ハザードマップでは浸水深50センチでしたが、実際の津波は10メートルに達しました。泳げるから、ライフジャケットがあるから大丈夫と思っただけで、助かりました。川沿いの土手に上がり、助かりました。

避難方法話し合いを

震災時は東松島市野蒜小6年生でした。地震が起きたのは下校のため校門を出た時で、すぐに小学校の体育館に避難しました。体育館は指定避難所でしたが、地震の1時間後に津波が襲ってきました。車いすのおばあさんが階に上がれず、泣き叫びながら水にまぐさった姿が忘れられません。水が洗濯機のように渦を巻き、18人が命を落としました。

東北福祉大3年
志野ほのかさん(20)



私の帰りを待っていました。震災の日も避難の準備をして私を待っていました。隣家のおばあさんが避難を呼び掛けても「ほのか」が帰ってこないのを待っていたので、いつも祖父は一人づつと通学路の方向

振り返って 風化防ぐ先進事例学ぶ

昨年5月、福井新聞社(福井市)の担当者から「むすび塾」を共催したい、という打診を受けた。その段階では福井地震(1948年)の6月28日の詳細を全て把握していなかった。

内閣府の報告書によると、福井地震では福井、石川両県で死者が71人不明と言え、45年の第2次世界大戦終戦から3年、連合軍総司令部(GHQ)主導による戦災からの復興途上だった。しかも、地震で沈下した九頭竜

東日本大震災の体験を振り返り、専門家と共に防災の教訓や避難の課題を語り合ってみませんか。町内会や学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022(211)1591。